

07 自分で決められる人生に（障がい者）

（ナレーター）皆さん、いかがお過ごしですか。福岡市がお送りする「こころのオルゴール」の時間です。今日は私、岡澤アキラがお届けします。

5

福岡市で障がい者の福祉サービス事業を展開する「株式会社きらきら」。社長の溝口伸之さんは幼い頃から車椅子での生活を送っています。進行性の難病「脊髄性筋萎縮症」と闘いながら、30歳で起業しました。

10

来年20周年となる会社を訪ねると、溝口さんは、周りのスタッフに訪問看護に関する指示を伝えていました。

「もう本もめくれないし、携帯電話も操作できなくなりました」と言いながらも、社員と共にやりがいを持って働いています。

15

【溝口さん役】小さいときは母がデパートや遊園地などに連れ出し、いつも私を応援してくれたので、卑屈になることはありませんでした。ところが高校3年生の夏、母が亡くなり、状況が一変したのです。

20

介護を引き継いでくれた姉が、仕事と両立できなくなり、私は介護施設へ移らざるをえませんでした。

25 そこで初めて、この体を恨み、自分では何も決められない、人生の選択肢がない、という絶望感を味わいました。

立ち直るきっかけは、同じような難病で同級生が亡くなり、自分自身の今後に向き合ったことでした。

30 さらに影響を受けたのが、大阪で出会ったパワフルな障がい者の方たちです。自分で電話をかけて何人ものボランティアに依頼し、一日中サポートを受けながら、生き生きと一人暮らしをしていました。その行動力に感動し、自分から求めていく生き方がしたいと思うようになりました。

35 障がい者を支える仕組みには、まだ多くの課題があります。私自身、生活全般に介助が欠かせないため、重度障がい者に対応できる福祉サービスの必要性を強く感じています。

40 私の会社では、入浴や排せつ、食事などの日常生活の支援、買い物やレジャーなどの移動支援、訪問看護、短期入所といったさまざまなサービスを提供しています。365日24時間の介護・看護を実施しているのは、利用者が本心に望む支援を届けたいからです。

45 生まれてきた意味は誰にも必ずあります。どういう生活をして、どんな人生を送りたいか、障がい者が自分で決めることができる世の中になりたい。

それが、私が福祉事業に込める思いであり、支えてくれる

人^{ひと}たちへの恩^{おん}返^{がえ}しでもあるのです。

(本文926字)